

武蔵野日曜聖書講筵 降誕節祈禱会

## 大歡喜の福音

——ルカ伝第2章8～20節——

1974年12月22日

小池辰雄

終りまで貫く 聖霊の力で動いている雑誌 十字架を通ってこその大歡喜 異次元の中に飛び込む 我投げかけるゆえに我あり 天来の喜び 聖霊が臨んだら本当に大歡喜 私は死んでも死にません この聖霊が来たら 十字架を通った御霊のキリストが私たちの中に生まれる キリストの生命の愛の溢れている事態 祈り

### 【ルカ2:8～20】

8 この地に野宿して夜、群を守りおる牧者ありしが、9 主の使その傍らに立ち、主の栄光その周囲を照したれば、甚く懼る。10 御使かれらに言う『懼るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歡喜の音信を我なんじらに告ぐ、11 今日ダビデの町にて汝らの為に救主うまれ給えり、これ主キリストなり。12 なんじら布にて包まれ、馬槽に臥しおる嬰兒を見ん、是その徴なり』13 忽ちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讚美して言う、14 『いと高き所には栄光、神にあれ、地には平和、主の悦び給う人にあれ』15 御使等さりて天に往きしとき、牧者たがい語る『いぎ、ベツレヘムにいたり、主の示し給いし起これる事を見ん』16 乃ち急ぎ往きて、マリヤとヨセフと、馬槽に臥したる嬰兒とに尋ねあう。17 既に見て、この子につき御使の語りしことを告げたれば、18 聞く者はみな牧者の語りしことを怪しみたり。19 而してマリヤは凡て此等のことを心に留めて思い回せり。20 牧者は御使の語りしごとく凡ての事を見聞せしによりて、神を崇め、かつ讚美しつつ帰れり。

### ●終りまで貫く

私はルカ伝のこのところは大好きです。その後半も大変なところで、『言い逆らいを受くる徴』

という題で清瀬の療養所でクリスマスをした歴史的な場所でもある。『曠野の愛』誌の26号を、まだお読みにならない方は読んでみてください。

今日は、私は時間を超越してやりたいように思うくらいなんです、東京の生活というのはどうも時間に制限されてうまくない。これが田舎だと、みんな歩いて帰るからいい



れども、東京は電車がどうのこうのというわけです。いつか、手島郁郎さんがうちの集会へやってきて、

「東京の人は時間ばかり気にしている」

と言って、二日くらい徹夜して集会をしたことがあります。まあ、それは多少、近所迷惑になって困ったこともありましたが（笑）。とにかく、あの頃はものすごく私自身も燃えていましたから。今は燃えていないのではなくて、燃え方がただ底力の燃え方をしている。時あつてか爆発するわけです。

今、O君が

「自分は赤字決算だ」

と言われましたが、誰でもがみんな赤字なんです。S君は黒字なんて言ったけれども、その黒字は上から来ているだけの話で、S君自体は赤字である。我々はみんな赤字存在です。この赤字存在が、黒字どころではない、黄金字になる。黄金の光、正に光そのものとなる。これは最近いらつしやった方であろうと、何年いらつしやった方であろうと、時間的な甲乙はありません。キリストは、

「後なる者は先に」

と言われたくらいですから。そういった相対的判断はいらない。絶対の世界は、十字架の片一方の盗賊はまつ先にキリストと一緒に天国に入ってしまった。そういうわけですから、人間的な体裁はいりません。

福音を本当にまともを受けとっているかどうかは、感話を伺ってもすぐ分かるわけです。

「終りまで耐え忍ぶ者は救われるべし」

とありますが、今日一日でもいろんな用があつたかもしれないけれども、やはり終りまで耐え忍ばなくてはいけない。終りまで貫くということが大事です。

どうぞ皆さん、どうぞ右にぶつかり左にぶつかつてもいいけれども、とにかく終りを全うしなかつたらつたららん。大変、途中はよさそうだけれども、終りになって消えてしまうようなのは本当につまらない人生です。人生は馬拉ソンであつて、ずいぶんピリッカスを走っているようだが、終わりになって加速度が出てくる。そういう意味において、人生の馬拉ソンを終りにゴールインするまで走りぬくこと。これを本当に希望します。

●聖霊の力で動いている雑誌

手島郁郎さんが去年の今ごろ亡くなった。いわゆる「無教会」は——手島さんも時々、無教会なんて言っているものだから——その主宰者が死ぬと、その雑誌は廃刊になってしまう。これは例外なしに今まではそうです。それで、手島さんの奥さんも来られたし、一番弟子のY君たちも来まして、私にちよつとそういうことも相談された。それで、私は言下に、



「何を言うか。君たちは手島さんの弟子であるといっても、手島さんの雑誌は聖霊の力で動いている雑誌だ。それが手島さんが逝ったからといって、廃刊を考えること自体がもう間違っている。これは歴史の終りまで続ける」と、はつきり私は言ったので、彼らはびつくりしたと共に非常に喜んで、

「これではつきりしました」

と言いました。やはり、聖霊の群といつても、時々そういつた本当の自覚のないところが、まあお互いに人間ですから、ありますけれども。そのことは今度も告白してあります。彼の編集後記のところに、

「小池先生がこう言ってくれた」

と書いてあります。

普段は手島さんと私はほとんど交渉がない。このところずっとなかった。けれども、私は、手島さんが世の中でどう言われようと、また、彼のやることがいわゆる異端視されるようなことがたとえあろうともなかりとも、彼の中に燃えているところのものは聖霊によるものであることを私ははつきり、人間手島を越えて手島君を動かしているものを知っている。それを信じぬいてきました。ですから、手島さんの同年輩の友だちは私一人だったんです。そのことをまた手島君も私を信じてくれて、

「今度の元日に自分は大集会をしようと思ったけれども、再び立てなくなつた。小

池先生、やってくれ」

と。私のことを「先生」と言うんですけれども。もう私は言下に、

「やりましょう。御名のため、福音のためなら喜んでやります」

と言つた。それで立ち上がったわけです。キリストの実存のことを語ろうと思つたが、手島さんが天界へ逝ってしまったから、それで手島さんの記念会を兼ねながら、もちろん福音の、御名のための集会でありましたけれども。

私にとつても、今年は元日からもう違つていた。神さまから、今年はこの時機を画する年が始まつているということ、元日から私は既に実践的に示されてしまった。それでこれはただごとでないというので、私も走つてきました。

本当は『無者キリスト』を今年に出したかつた。いろいろな事情でまだ出さないでいますが、正直もうほとんど出来上がっているけれども、最後の仕上げをします。来年は何としても――もし、河出書房で出さなければ――何とかして自費でも出したいと思っています。そういうことで、もう来年をずらすわけにいかない。カイロスが本当に来ていることを感じます。

私たちは正直、歴史的に、キリスト教の歴史において、小さいながら或る一つの大事な役割を課せられている。そのことを諸君も自覚してください。大変私はうれしく存じます。



## ● 十字架を通過してこその大歡喜

どうですか、ペテロは学問がありましたか。漁夫ではないですか。お魚を採っていたペテロにキリストの霊が臨んで彼は立たせられた。キリストが地上におられた頃、ペテロは一緒にご飯も食べ、一番親しい間柄でいたけれども、ペテロは躓いたり転んだりしてどうにもならん。けれども、

「今にお前は、私が言ったりしたりしたことが分かる時がくる」

と言われた。これは

「キリストが十字架を通過して贖罪を果たしたら聖霊が来るぞ」

ということ。十字架の贖罪、このバプテスマを通らなかつたならば聖霊はこない。キリストが与えようとする聖霊も、彼自身が生命を棄てなければ来なかつた。贖罪の事態をしなければ来なかつた。

私たちも聖霊を受けるためには、どうしてもキリストの十字架の贖罪のこの霊的な事態を受けとらなければ、聖霊は来ない。キリストを私たちの中に生まらせるためには、クリスマスにもやはり十字架を通らなければ、聖霊の世界には来れない。このことはもう明々白々なんです。この大歡喜の音信は、しかし、深刻な十字架を通過してこそ大歡喜の音信である。我々はいろいろな人生の悩み苦しみを通る。それはキリストの贖罪の十字架とは比べものになりません。次元が違います。けれども、そういったところを通過して初めていよいよ十字架の有難さがわかる。マイナスであればあるほどプラスは大きいんです。

そういうことで、私たちはこの最後の祈禱会にのぞんでいるわけです。この祈禱会で御霊の世界に何らかの意味において触れてください。力みでも何でもありません。

「しからずんば、ここを去るわけにいかん」

というだけの心構えでこれに立ち向かっていただきたい。

私は、自分で言っておかしいけれども、魂は非常に弾力性があつて柔軟です。たとえば、手島さんと一緒に阿蘇の集会をしました。その時に、彼らが絶叫的に

「お父やまー」

と叫んでいる——無教会でああいう叫びを聞いたことがない——その時に私は一応驚いたと同時にすぐその中に入るんです。

「あつ、これは本ものだ。彼らの叫びは決して体裁で叫んでいるのではない。全存在で叫びかかっている」

と。私はすぐその中に入つたら、もうたちまち自分自身が異言になつてしまった。

どうぞ、嵐を見れば嵐となり、無風体を見れば無風体となり、そよ風を見ればそよ風となり、花を見れば花となり、木を見れば木となる。そのような柔軟な魂になつてください。そうすると、楽に受けとれてくるんです。たとえば海でも波があつて、これは今度は酔うかななんて思つたら、これは酔つてしまう。けれども、波の上下に従つて自分も上下するよう



な気持ちになっていっていると酔わない。船で玄界灘を渡ったときに、私は最後に残った。あとはみんな酔って逃げて行ってしまった。なぜそういうことかというのと、私の魂が柔軟だからです。波がくれば波に従う。従いながらそれを満たしていく。あるいは従いながらそれを征服していく。

男女同権なんていうけれども、女性は男性に従いながら男性を征服する。それが本当の女性なんです。征服するという言葉はおかしいけれども。男は強そうで実は弱い。しかしながら、強そうな顔するのはやめて——神・キリストには絶対に勝てませんよ——神・キリストの前には本当に降参して、神・キリストの前に平伏す。私は今度の『生命の光』誌にも書いたでしょ。

「あなた方は聖霊の権威を持って。ただし、平伏<sup>ひれふ</sup>しの魂で行け」

と、私は彼らの群に呼びかけました。

いつもキリストに帰ればいい。イエス・キリスト自身はどうであつたか。彼は本当に神さまの前に、父の前に平伏していた。自分を何者ともしていなかった。そうしたら、神の権威が来た。神の御姿がやって来た。神の生命が、神の光が来た。だから、

「我を見し者は父を見しなり」

と言えた。これは彼自身が本当に自分をゼロにしているからです。そこにこそ大歡喜がやって来るんです。

### ●異次元の中に飛び込む

それでは、ルカ伝に入りましょう。なにも解説するわけではありません。

8 この地に野宿して夜、群を守りおる牧者<sup>ひつじかい</sup>ありしが、

野宿していたという。よくその現場を想像してみてください。その現場に入ることです。

「聖書はドラマであるからそのドラマの中に入って行け」

と申し上げている通りです。羊の群を守っている牧者です。詩篇23篇のごとくに、

「エホバはわが牧者なり。われ乏しきことなし」

と。イスラエルの民族の姿が羊飼いと羊の姿。そういった牧者があつたが、

9 主の使その傍らに立ち、主の栄光その周囲を照したれば、甚<sup>いた</sup>く懼<sup>おそ</sup>る。

どういうことですか、これは。キリストの来ない前に——来ないと言つたつて、降誕はあつたわけですけども——正に降誕のこの瞬間に御使が現れてきて、そして主の栄光がその周囲を照らした。

「御使」で、私は思い出すのは、私の集会のクリスマスで或る時、本当に御使が、天使が立つた。並みいる一人びとりの後ろに二人ずつ天使が立つてしまった。私の回りに七人いたそうです。ある人がはつきり見た。これは靈的な世界ではそういう現象が起きる。

10 御使かれらに言う「懼<sup>おそ</sup>るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歡喜



## この の音信を我なんじらに告ぐ、

### 「おそ 懼るな」

という言葉ですが、恐れと疑いは福音の世界で禁物です。私なんかは生まれつきの臆病者ですけれども、この福音の世界に来たら、とにかく——それは心の片隅にはあるかも知れないけれども——そいつは乗り越えてしまっている。大体昔は、私は弱虫で気が弱いものだから、学芸会や何かで壇上に立たされると、足が震えてしまっていた。唱歌の試験で立たされると、あまり歌えないんだ。普段歌えるくせにね。私は正直そういう弱虫なんです。ところが、この福音の世界に来てから、全然そういうことがなくなりました。ということ、

### 「我弱きときに強し」

というようなことで、キリストの御力がきて、聖霊の権威でもって、相手が何千人いようが——あなた方はここは何十人か知らんけれども——これが二千人であろうと三千人であろうと、ひとつも変わりがない。それは有難いことに御霊の権威なんです。この「懼るな」というのは、

### 「御霊の権威を与える。懼れなき世界に入れてやるよ」

ということ、

### 「おそ 懼れるな」

と言ったって無理ですよ。生まれつきの我々はいろいろな欠陥があるんだから。けれども、この聖書の言葉はもう一つ奥で読まなくてはいかん。

### 「懼るなと仰つても、でも、こわいんです」

と言いたいところです。次元の違った世界、異次元が——天使が現れてくるところは絶対次元の世界ですから——絶対次元の霊的な世界がこの相対界に臨んでこようとする——こっちは相対次元だ。我々の普通の現実相対次元だから、何のかんのとやっているわけです——この絶対次元が臨んでくると、これは恐いんです。けれども、

### 「私たちのこの次元の中に飛び込んでみる。そうしたら、懼れなき世界に入るぞ」

ということ、この「懼るな」というのは。もう、祈りのこっちはただそれだけです。恐れていたら、もしこわかったらば、そのまま投げ入れる。こわさを取ろうとしないんです。いいですか。「どうも変だ」とか疑っていたって、そのまま投げ込んでいくことです。

### ●我投げかけるゆえに我あり

午前だけで帰った人のことを私はどうこう言うわけではないけれども、やはり、終わりで残ろうとする気合のないということは、本当はクリスマスに来る資格はない。そんなこと言ったら悪いけれどもね。Sさんなんて、一年に一遍だからと言って、今日は他の人に



留守居をしてもらって出ていらっしやった。これがやはり、一年に何回出ててもいい加減な出かたよりも、ただ一回限りでも、その気合で出てらっしやるのが本当なんです。

懼れなき世界はどんなものだろう。自分自身をそのまま、分裂のまま、かたくななまま、恐れのまま、疑いのまま——私はさつき、恐れと疑いは禁物だなんて言っただけでも——そのまま投げかける。そのまま投げかけると、そいつはすっ飛んでしまう。溶かされてしまいか、すっ飛んでしまう。小さな子どもがそうじゃないですか。もうお母さんの姿を見れば、あとはどうだっついていいんだ。

「おかあちゃんー!」

と叫んでいて、おかあちゃんの所まで行けなくなつて——そこでぶっ倒れても、おかあちゃんとは跳んで行きますよ——そういうのがこの信仰の世界なんです。だから、

「おきな幼児にならずば天国に入れない」

とキリストが言われたのは、幼児が泣いてせまる、それが

「おきな幼児にならずば」

という本当の意味かもしれない。私は今日初めて言うけれども。

そういう、あるがままに自分を投げ出す、ぶっ倒れるということだけです。そして、

「ぶっ倒れるところはあなたの懐の中です、あなたの御腕の中ですよ。」

ということ。いいですか。その他は考えることはないですよ。

考える癖のある人があるね、

「我思いうゆえに我あり」

なんて。ちつともありはしないんだ。迷つてばかりいる。デカルトはけしからんことを言つた。哲学の世界では、それは一つの真理かもしれないけれども。シュバイツァーがはつきり言ってます、

「デカルトがあんなことを言つたものだから、とんでもない話だ」

と。「ゆえに我あり」というのは、

「我投げかけるゆえに我あり。我ぶっ倒れるゆえに我あり」

なんていうわけだよ。これは詩篇にもある。

「自分の足が滑つたと思つたら、聖手の中にあつた」

と詩篇の中に書いてある。そういうように、図太い信仰にならなければダメですよ。あなた方は何を考えているんですか。私たちは、どこでぶっ倒れても、空気の中にあるではないですか。空気から我々は離れることができますか。

どこでぶっ倒れても、天地生命の気の中に私たちは入っている。即ち、キリストの聖霊の気の中に私たちは入っている。魂は実は聖霊を吸つているということに気がつけばいい。神さまの方からはやって来ているんだから、キリストの方から。至る所これ聖所であり、至る所これ幕屋であり、至る所これ神殿です。豁然として、



「ははあ、恐れなき世界は既に我々のこの周辺に、わがうちに来ていた」と気がつく。もう一つ言うと、

「キリストを受けとれ。しからは恐れはなくなるぞ」ということです。

## ●天来の喜び

「大なる歡喜の音信を我なんじらに告ぐ」

これはもう旧約で預言している。ゼカリヤ書9章9節に、

「9シオンの女よ大に喜べ、エルサレムの女よ呼われ、視よ汝の王汝に来る。彼は正義しくして救を賜り柔和にして驢馬に乗る。即ち牝驢馬の子なる駒に乗るなり。10我エフライムより車を絶ちエルサレムより馬を絶たん。

戦車や軍馬を絶つてしまおうぞと。

戦争弓も絶たるべし。彼国々の民に平和を論さん。その政治は海より海に及び河より地の極におよぶべし。」(ゼカリヤ9・9～10)

全世界にのぞんでいく。これは素晴らしい預言です。こういう句はもうキリストはちゃんと自分の身に受けとっておられる。だから、あのようにエルサレムに入城されたわけです。

「救いが来るから、本当に喜べ喜べ」

と。それからイザヤ書62章、

「1われシオンの義あき日の光輝のごとくにいで、エルサレムの救もゆる松火のごとくになるまではシオンのために黙さずエルサレムのために休まざるべし。……5わかきものの処女をめとる如くなんじの子輩はなんじを娶らん。新郎の新婚をよろこぶごとくなんじの神なんじを喜びたもうべし。」(イザヤ

62・1…5)

シオンに係るところの、今度は天来の喜びです。こっちが喜ぶばかりでなくて、天来の喜びがある。イザヤ書61章3節、

「3灰にかえ冠をたまいてシオンの中のかなしむ者にあたえ、悲哀にかえ歡喜のあぶらを予え、うれいの心にかえて讚美の衣をあたえしめたもうなり。かれらは義の樹エホバの植えたもう者その栄光をあらわす者となえられん。」(イザヤ61・3)

「歡喜のあぶら」というのは聖霊のことです。聖霊のあぶら、聖霊がやってくると、本当にこれは歡喜の世界に入る。旧約の預言はたくさんあるけれども、もう一箇所開いてもらいましよう。ゼパニヤ書3章17節、

「17なんじの神エホバなんじの中にいます。彼は拯救を施す勇士なり。彼なんじのために喜び樂しみ愛の余りに黙し、汝のために喜びて呼わられたもう。」(ゼ



パニヤ3・17)

という非常に著しい言葉がある。

「なんじのために喜び樂しみ愛の余りに黙し、汝のために喜びて呼わりたもう」

と。何でも言葉は絶すると沈黙になる。沈黙は無限の言葉である。そういう喜びの音信がくるのだという。それは

11今日ダビデの町にて汝らの為に救主すくいぬしうまれ給えり、これ主キリストなり。

「救主、メシヤが生まれた」なんていうことは、その当時のユダヤ人に言うと、地上の王者が生まれたということになって——パレスチナはローマ帝国の属領ですから——反逆者が生まれたということになってしまっているので、「メシヤ」と言うことは本当は非常に危ないんです。

### ●聖霊が臨んだら本当に大歓喜

地上の第一人者アウグストウスがいた時、世界の唯一者ナザレのイエスが生まれた。即ち、世界帝国のローマの中に、世界を征服するところの別な次元の王者が生まれたという非常なコントラストです。この別な次元の王者は、しかしながら、王宮に生まれたのではない。馬槽の中に生まれた。

12なんじら布にて包まれ、馬槽うまぶねに臥みどりじしおる嬰兒を見ん、是しるしの徴なり』

と。イエス・キリスト自身が最大の徴です。「ユダヤ人は徴を求める」と言うけれども、いわゆる奇蹟的な徴ではダメです。

実は本当はイエス自身が奇蹟中の奇蹟なんだ。これが最大の徴なんです。ところが、この徴にみんな躓くわけです。これは

「言い逆らいの徴」

になってしまった。ルカ伝の2章の終りの方に出ている。人々に言い逆らいを受ける徴になる。やがて十字架です。そのことはもうシメオンが示されている。今にマリヤがキリストの十字架のために悲しむ時がくると。もう降誕の時に十字架のキリストがシメオンを通して預言されている。であるので、何が歓喜かと思うわけです。けれども、歓喜はただ直線的にはやってこない。

キリストは十字架の贖罪の死を遂げて、天界に行って、そして今度はもう一遍おりてくる。この聖霊が臨んだら本当に大歓喜なんだ。大体、キリストの降誕の時に、大歓喜の音信なんて言ったって、これはみんな分からんわけですよ。この牧者たちだって、何のことか本当は分かかってない。私たちはキリストの降誕節に——我々はそこらのチャカチャカしたようなクリスマスとは違う。あんな喜びは消えるような喜びです——今晚受けとる喜びは消えない喜びなんだ。消えない喜びを受けとるためには、イエス・キリストと一緒に、十字架の死の中に——死という言葉はあまりいい言葉ではないけれども——十字架の中に自分をいれる。



「われキリストと共に十字架せられたり」

と。ということは、さつきから申し上げているとおり、何も懼れることはない。実際、私はこれから十字架にかかるわけではないんだから。

「このままでお前は十字架に。キリストの贖罪を受けとれ」

「はい、私はこのままで十字架されましたか」

と。こんな無条件の恩寵がどこにあるんですか。このままで十字架されて、もう神さまの方では私を、私の罪なんてものを見ない。罪なる私を見ない。「私の罪」なんて、「この罪あの罪」ではないですよ。罪なる我を見ないと仰る。

「お前を見るときは、御霊の中にいるお前を見るぞ」

と仰る。だから、あなた方も、それが相対的なマイナスであろうとプラスであろうと、そんなことは問題ではない。本当ですよ、ええ。そんなことを問題にしているうちはダメです。時間を一時間まちがえてやって来た人もある。いいんだよ、それで（笑）。それだけ、午前に出損なっただけ、U君は夜は二倍にしてこれを受けとる。そういう救贖ゾーンにもはや問題なき世界に入った。懼れなき世界に入る。一番面倒臭いのは自分自身なんですから。一番面倒臭いこの自分自身というやつが片付いているんですから、こんなうれいしいことはないじゃないですか。我々は死に至るまで、自分を見たら問題が片付きっこない。どんな立派な人だって、私は立派なんて言いませんよ。神さまの光から見たら、いわゆる立派なほど実は神さまから遠くなってしまう。

「神さまは要らん」

なんていう顔をしちゃうからね。

### ●私は死んでも死にません

こないだ、ある人が

「私は無神論者ですけども、この患者は非常にかわいそうな人ですから」

なんて言うから――「無神論者」なんて何を言うかと思っただけでも。まあ、そんなことは言いませんが――どんな窮地にあるような、ヨブのように身体がくずれたような人でも、私は祈りに行った。訪ねたら、ちょうど麻酔がかかって寝ていたから、その人に語るわけにいかなかったけれども、その奥の世界でその人のためにグッと祈った。そして、

「この人はもう治らない不治の病だけれども、しかし、神さま、この魂を受けとつ

てください」

と、私は心の中で泣いて祈っていた。その人がどんなに相対的な苦しみをしても、その魂は私の執成とりなしによって次の世界では神さまの中にいく。それだけの自信をもって人のために執成してくださいよ。

「果たしてそうなるでしょうか」



なんてのは決して祈りではない。

「祈りたることは聞かれたりとせよ」

というのは、キリストは、

「100%に疑わずに祈れ」

ということですよ。どうせ、この地上はみんな死ぬんですよ。地上の生死なんていうのは、常に今、現在の相対的生において乗り越えて、

「私は死んでも死にません」

ということを本当に受けとらないで、何が信仰かと言うんだ。

「永遠の生命」

なんて、ただ口で言っただけでしようがない。それは観念信仰という。無教会が

「十字架、十字架」

と言っているけれども――悪くはないよ――

「なぜ、聖霊の世界に來ないんですか」

と言いたい。

「手島さんと私がなぜ、無教会のアウトサイダーになったか。私たちは使徒たちと一緒に御霊のインサイダーになりたかった。そして、本当にその中に入ったから

有難くてしょうがない」

と、私は今度の『生命の光』誌にも書きました。

世界の大神学者ブルナーを相手に私は2時間もしゃべってしまった。ブルナーといえども、聖霊のことになったら私の方が先輩なんだ。ブルナーはさすがに神学者だから、聖霊についてはちゃんと素晴らしく書くけれども、ある程度はブルナーも接触しているけれども、私が異言の賜物があると言ったら、びっくりしているんだ。私は、

「ブルナーさん。あなたは無教会をかいかぶりすぎていますよ。無教会はまだ使

徒たちの信仰の手前です」

と言いましたよ、はつきり。

私がブルナーさんと一緒に銀座の教会で話をすれば、私は10分くらいの話で、塚本先生が驚いた。私に葉書をくれた。私はそれを今度はあれに載つけた。今までは発表しなかつたけれども。先生がいらつしやる時に発表したら悪いと思ったから。先生が私を無条件に評価されて、

「こんな話を今まで君から聞いたことがない」

と言って喜んだ。ということは、塚本先生は勘がいい方だから、その点は分かるんです。けれども、それをもし公にすると、

「無教会で塚本先生が手島だの小池を認めた」

なんてことで、無教会がガタガタになるからね。それで先生はそれを伏しておく。それは



先生の政治的なやり方なんだ。まあ、そこまで言つては悪いかもしれませんが。もうはつきりしている。私は無教会の本流にいたから。無教会の善さと欠陥と、主義にこだわつてパリサイになつているところが分かる。

### ●この聖霊が来たら

どうぞ、皆さん、この中に入つて、

「もうキリストと共に十字架されました。本当にありがとうございます」

と。時々、深く本当に祈つてくださいよ。

「私はこの祈りでもって十字架を本当に受けとつて、御霊の世界にこなければ、私はこの祈りから去りません」

というような祈りを自分ひとりで行つてごらん下さい。徹夜でもして。必ず来るから。何年い加減なことをしてはいたつてしょうがないから。

あのウエスレーのお母さんは——ウエスレーはだいたいぶ脱線の少年だったんだ——そのときに、はるかかなたにいる少年のために祈つて、

「今晚、あなたが私の祈りを聞いてくださるまで、私はこの祈りをやめません」と言つて祈つた。そしたら、ウエスレーにその祈りが響いたんですよ。彼はそれから本当に改心した男になつた。あのメソジスト派の創始者は、実はウエスレーのお母さんが偉かつた。

これからの日本は、女の方々がそういう魂で第二の国民をつくつてくださらなかつたらばしょうがない。私は女学校の校長になろうかと思うくらいだ。今、教育で大事なのが家のお母さんなんです。このお母さんが百貨店通いばかりしていたのではしょうがない(笑)。あつちがどれだけ安いだのとかね。

日本というのは本当に何とかしないとダメです。もう、あなた方、目が覚めた人が地道に本当にそれを戦つていかなければ。そして、一人から一人へと個別的な伝道をしていかなければ。そうしたら、いつでもこの集會に引つ張つて来てください。この集會では決して私は一回といえどもおぎなりのことをしてはいるのではないんだから。

このイエス・キリストの霊が来たらば、あなた方一人ひとりが見世界を相手にすることになる。ジャンヌダルクがどうですか。あの女性がイギリスの軍隊を相手にしてあのような戦いをしたのは、彼女には霊的な力が来たからです。なにも戦でどうのこうのということとを言うのではないけれども。あるときヒットラーが殺そうと思つた女性を殺せなかつた。これは本当にその女性が霊的な女性で、ヒットラーの使いがピストルで撃とうとしたけれども撃てなかつたという。

どうぞ、祈りの世界で本当に、

「キリストわがうちに、われキリストのうちに」



という境地を体験してください。この聖霊が来たら、

「懼るるなかれなんて言っても、私たちは懼れません。もううれしくて仕方がありません」

ということになる。私たちにとつては、キリストの「十字架・復活・聖霊」の事態は、クリスマスであろうと復活節であろうとペンテコステであろうと、同じなんだ。一年に三回、徹底的なことをやるわけだ。毎回そうだけれども。

そのようにして、聖霊が臨むこの事態を受けとっていく。

「大なる歡喜の音信を汝らに告ぐ」

というのは、キリストが誕生したことがなぜうれしいのか。

「メシヤが来たからというけれども、一体そのメシヤという内容は何ですか」

ということがちつとも分かってない。これは天界では分かっているけれども、この牧者たちも実は分かっていない。

<sup>13</sup> 忽ち<sup>たち</sup>あまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讚美して言う、<sup>14</sup> 『いと高き

所には栄光、神にあれ、地には平和、主の悦び給う人にあれ』

と。これは天使が言っているんだからね。

「いと高き所には栄光、神に在れ」

ではない。

「神に現れたり」

なんです。「神に」と言つて、「在れ」という言葉はない。

「栄光が神に今、現に現れたり。それだから、いよいよ在ってください」

という内容です。私はそのことに気がついた。そしたら、ある学者がやっぱりそのことに気がついたらしいので、そういう論文もありました。

「地には平和」ではない。これは「平安」なんだ。「シャーローム」です。

「地には平安が主の悦びたもう人に来たれり」

ということです。やつて来たという現在完了です。現実を言っている。現実を讚美している。本当の平安がやってきた。けれども、それはまだ、ペンテコステを通つたあとのような内実においてはもちろん受けとっていません。天使はそのことを天界で示されてはいるでしょうけれども、そのことを示されたのは、あとに来るシメオンという人です。

「<sup>25</sup> 視よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ敬虔にしてイ

スラエルの慰められんことを待ち望む。聖霊その上に在す。」(ルカ2・25)

とある。その後半のところがある意味において非常にまた大事なところですよ。

● 十字架を通つた御霊のキリストが私たちの中に生まれる

私たちがそのようにしてこのキリストを受けとる。御霊のキリストを受けとる。馬槽の



中に生まれたキリストにおいて私たちはもう一つ、十字架を通った御霊のキリストを私たちというこの馬槽の中にいただくときに、クリスマスは本当の大歡喜の音信であることが受けとれるわけです。イエス・キリストが受肉されたということは、幕屋を張られたということは、御霊の愛と生命と力のこの彼を私たちの中に今迎えたてまつることが、キリストが私たちの中に本当に生まれ、私たち自身が新たに生まれるということになるわけです。キリストと共に新しくキャンドルとなつて、世の光となつていく。

### 「汝らは世の光」

とは、

「我は世の光なり。ゆえに汝らは世の光なり」

なんです。いかなるものも愛しぬいて、これを救い上げてしまうことが最大の強者のわざです。イエス・キリストの中に入って、そこから祈っているときに、懐の中に入ってそこから祈っているときに、その祈りはもの凄い力をもっている。これは相手を、魂も肉体も本当に救いあげてしまう。そういうことがいくらでもあるわけです。

前にいたT君という青年が明日、心臓の手術をすると言うから、

「どんな名医だか知らないけれども、私はあまり感心しないね。T君、僕の祈りを受けとるか」

と言ったら、

「はい、祈ってください」

と。それで、私はT君の胸に手を置いて祈ったら、治ってしまった。翌日病院へ行ったら、

「君はもう治っているから手術することはない」

と言われた。神さまはそのような力を持っている。

私たちを通して、あなた方一人びとりを通して——のつぴきならない現実では、

「私にできない」

なんてことを決して思わないでください。「私」ではないんだから、「我々」ではないんだから——キリストがなしたもう。どうぞ、自分をキリストに全托して、その極限状況に立ち向かってください。必ず勝つから。相手がどういふことであろうと、あるいは、どういふような窮状であろうとも。

### ●キリストの生命の愛の溢れている事態

どういふことをしていても、キリストの御霊の証者であることが、私たちの日常生活の一番大事なことであるし、一番うれしいことなんです。だから、本日、一生という。そこでは本日が即ち永遠の日である。永遠の日にしてしまっている。過去を救いあげ、現在を生かし、未来を引き寄せるような生き方ができる。このコスミックな宇宙的なキリストは私たちのの中に、こんな小さな破れ器の中に自在に入ってくださって、自在に働きたもう。



どうぞ、皆さん、もうくすぶったような顔はよしてくださいよ。あなた方の過去において何があるうが、そんなことはいいじゃないですか。どんどん先へ進んでいく。自分を乗り越えないで、過去をどうのこうのなんて言っている人は腐ってしまうよ。いいですか。どしどし先へ進んでいく。もはや、滑った転んだなんてことは問題なしに、いよいよ先へ進みます。相対的な現象を問題にせずして、絶対的な根源現実をいつも目指して、そこに魂の目を置いて進んでください。この群小なりといえども。

イエス・キリストの本当の弟子は三、四人だったじゃないですか。動かしていったのはペテロ、パウロ、ヨハネ、ヤコブ、これだけじゃないですか。ペテロなんてのは漁夫ではないですか。これが本当に聖霊にあつたらば、

「お前は今に人をすなごることになる」

と言われた。キリストの力が、御霊が入ってきたら、あなた方は何をやっていったって、会社であろうとみんな動かしてしまうよ。

「なんか、この頃、社長は変わってきたな」

なんていうことになる。みんなどこにおいてもそうです。私は学校でもいわゆる校長ではない。そこらとは比較にならない。そのつもりでやっていますから。

このようなキリストの懼れなき、本当にキリストの生命の愛の溢れている事態が即ち大歡喜の現実なんです。大歡喜とはその他の何ものでもない。この大歡喜の現実は、パウロが牢屋の中でも

「喜べ喜べ」

と。ピリピ書に書いたように、

「自分がつながらなくても神さまの言葉はつながらしていない。このキリストの愛か

ら離させるものが、天上下何があるか」

ということですよ。どうぞ、みんな、目から炎でも出てくれなければ。それでは、祈ります。キリストの中に。私が先に祈ります。あと自由に祈ってください。

## ● 祈り

主さま。1974年の元日から私たちは何か新しくあなたに呼びいだされ、つかみだされてきていることを、そしてこの一年間の、私たちの思いに過ぐるところのあなたの御顧み、御導きを感謝いたします。人間の側では滑ったり転んだり迷ったり躓いたり、いろんなことがあつたかも知れませんが。しかしながら、このようなことを通して、あなたは私たちを鍛え、またあなたのものとし、近づけようとなさっていらっしゃった。私たちの側のプラスもマイナスも問題ではありません。ただあなたの絶対なるこの恩寵を、あなたからのつかみかかりを、あなたから呼びかかりを感謝いたします。

主イエス・キリストさま、あなたが地上にこられて、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネに



つまび  
詳らかに書き記されてあるところのドラマチックな現実を、本当にあなたは地上であのようにして生きられました。かく語り、かく生きられました。これは私たちの想像を絶するところの驚くべき現実です。私たちがこの福音書にきたときに、何と福音書は素晴らしい現実かと、いよいよ来年も驚かしてください。恐れではなくして、あなたに驚くときに、驚嘆驚倒しながらあなたの中に取り入れられていきます。私たち自身がその驚嘆驚倒の現実とされてまいります。あなたが本当に私たちを、

「もはや、何も問題はない。私はみんな引き受けた。私がお前たちに、生命をやる。光をやる、愛をやる、生命をやる、力をやる」

と言つてくださって、入つてくださるから、

「我汝と共に、我汝の中に」

という、この「うちに」の世界にいよいよ入れられて感謝です。

兄弟姉妹たちが、

「ああ、これが本当の現実であった。空気に包まれるよりも、あなたに本当に抱かれているこの現実、何とあなたの御懐に入れられているこの現実、素晴らしいか」

と、私たちはあなたの御懐に入れられている幼児のごときものです。どうぞ、いよいよ力を与え、いよいよあなたに力強く進ませられんことを切に願ひ奉ります。

かくして、お父さま、あなたと一つであるこの驚くべき事態を本当に感謝いたします。

あなたの大なる歓喜をいただいて、この降誕節は実に、十字架の主イエス・キリストさま、

「われキリストと共に、あなたと共に十字架せられたり。もはや生くるにあらず」

と、あなたが生きていましたもうがゆえに感謝です。この現実をもって……

ハレルヤ、ハレルヤ……（異言）……

主さま、御名を讃え奉ります。どうぞ、ここにある兄弟姉妹たちは、

「ああイエス・キリストこれ一切なり」

と言つて進んで参ります。恐れなき世界に、兄弟姉妹たちがもはや己にあらず、ただあるがままにあなたの中に入れられて、感謝です。ただ御名を讃え、ハレルヤあるのみです。ハレルヤ、ハレルヤ。御名を讃え奉ります。アーメン、アーメン。……

